

滋賀県初!! 弥生時代の管状土錘を確認

- 赤野井浜遺跡の調査成果より -

キーワード 弥生文化 漁撈 海水域と淡水域 湖岸の遺跡

1. 遺跡の概要

赤野井浜遺跡は、守山市赤野井町から杉江町にかけて所在する遺跡（図1・2）で、弥生時代の集落跡として周知されていました。滋賀県が行う琵琶湖（赤野井湾）補助河川環境整備事業に先立ち、平成14年度から平成20年度に実施した発掘・整理調査の結果、縄文時代中期から鎌倉時代までにおよぶ複合遺跡であることがわかりました。その内容は、弥生時代前期から中期の建物、建物や穴を区画する方形区画溝、木棺墓、方形周溝墓、河道などの遺構や、出土品には縄文時代晩期前半から平安時代の土器や木器などの多量の遺物です。

今回の調査地の中央部には（図3）、川（河道）が流れており、出土している遺物から縄文時代から平安時代にかけて機能していたものと考えられ、川幅が約30mの2条の川（河道1・2と河道3）が合流して1条になり琵琶湖に注いでいることがわかりました。その川に挟まれた3つの微高地上から弥生時代の集落が見つかっています。そのうち、北側微高地（平成16年度調査地点）では、弥生時代前期末から中期前葉を中心とした方形の溝で区画された集落が作られ、その後、川を挟んだ南側微高地（平成15年度調査地点）に集落が移動としていることがわかりました。

2条の川跡からは、弥生時代前期から中期の土器、石器、木器などを中心に、縄文時代晩期から平安時代の遺物が出土しています。これらの遺物の中には、縄文時代晩期の屈折象土偶・黥面（げいめん）土偶、西日本初の出土となった弥生時代中期前葉の土偶形容器や日本最古級の弥生時代中期中葉の準構造船の部材、北側微高地の方形周溝墓から弥生時代中期中葉の木偶（もくぐう）などがあります（参考資料：いずれの遺物も平成15年3月・平成19年1月に記者発表）。

2. 滋賀県初!! 弥生時代の管状（かんじょう）土錘

今回、発掘調査で上記の河道1・2や小穴から土錘が34点出土していましたが、その後の整理調査で、滋賀県最古となる弥生時代前期末～中期中葉に使用された土錘であることが、河道や小穴から出土しました他の遺物の時期・形状の検討から明らかになりました。

管状土錘（図4）

土錘とは：粘土塊の中心に棒状工具で穿孔し、管状に成形をし、素焼にします。そして、その孔に漁撈用の網を通しておもりとするものです。弥生時代の土錘は孔径が古墳時代以降の土錘に比べて小さい点が特徴です。また、形状は卵形あるいは紡錘形の縦長の形と球形のものがあります。

出土点数：34点（卵形・紡錘形が28点、球形6点）

大きさ：【卵形・紡錘形】長さ 最小4.0cm
最大7.3cm
平均5.4cm
幅 最小2.4cm

		最大 3.9cm
		平均 3.3cm
【球形】	長さ	最小 2.0cm
		最大 3.2cm
		平均 2.5cm
	幅	最小 1.7cm
		最大 2.3cm
		平均 2.0cm

重さは 8.1 g ~ 113.9 g 平均 48.9 g

卵形・紡錘形の土錘は 55 g ~ 60 g にかけてのサイズが最も多く、100 g を越える大型の土錘は 1 点のみです。球形の土錘は 8.1 ~ 22.3 g と卵形・紡錘形の土錘より軽い傾向が見られます。また、網を通す孔の大きさは 0.3 ~ 0.9cm で、平均 0.6cm と平安時代以降の土錘に比べて狭い傾向が認められます。

出土位置：小穴等の遺構から 3 点、河道 1・2 から 18 点が出土しています。

時期：弥生時代前期末から弥生時代中期中葉

3. 意義

- (1) 琵琶湖や河川での使用を対象にしていた網漁は、縄文時代に盛んに行われていましたが、錘に使うのは川原石を用いた石錘や土器の破片を使用した土器片錘でした。今回の赤野井浜遺跡の管状土錘の出土例から琵琶湖周辺では弥生時代になってからも石錘の代わりに土錘を使った網漁が行われていたことが初めて明らかになりました。

管状土錘は縄文時代にはなかった網漁用の錘で、朝鮮半島より水稻文化と共に北部九州地域に伝来し、瀬戸内海・日本海沿岸を中心に広がっていくことがこれまでの出土例や研究でわかっています。赤野井浜遺跡で管状土錘が出土したことで、稲作や木製農耕具などの稲作文化に伴って管状土錘による網漁が、淡水域である琵琶湖にまで到達していたことが明らかになりました。

- (2) 赤野井浜遺跡を含めて弥生時代前期後半から中期前葉の大規模な遺跡は、琵琶湖岸を含めた湖岸部に近い場所に多いことが従来から指摘されてきました。これは、水田を作るために適した土地や水利の確保が行いやすいなどの利点から、琵琶湖岸や河川の河口部の安定した土地を選んで集落が作られたと考えられてきました。しかし、今回の発見により、水稻における利点だけではなく、湖岸部や河川河口部が漁撈を行うには絶好の立地であることも理由の一つとしてつまり、網漁や水稻などを含めた総合的な生業の必要性からこのような場所に遺跡が集中する結果になったことが考えられます。



図1 赤野井浜遺跡調査位置図



図2 赤野井浜遺跡調査区位置図



図3 赤野井浜遺跡検出遺構概略図

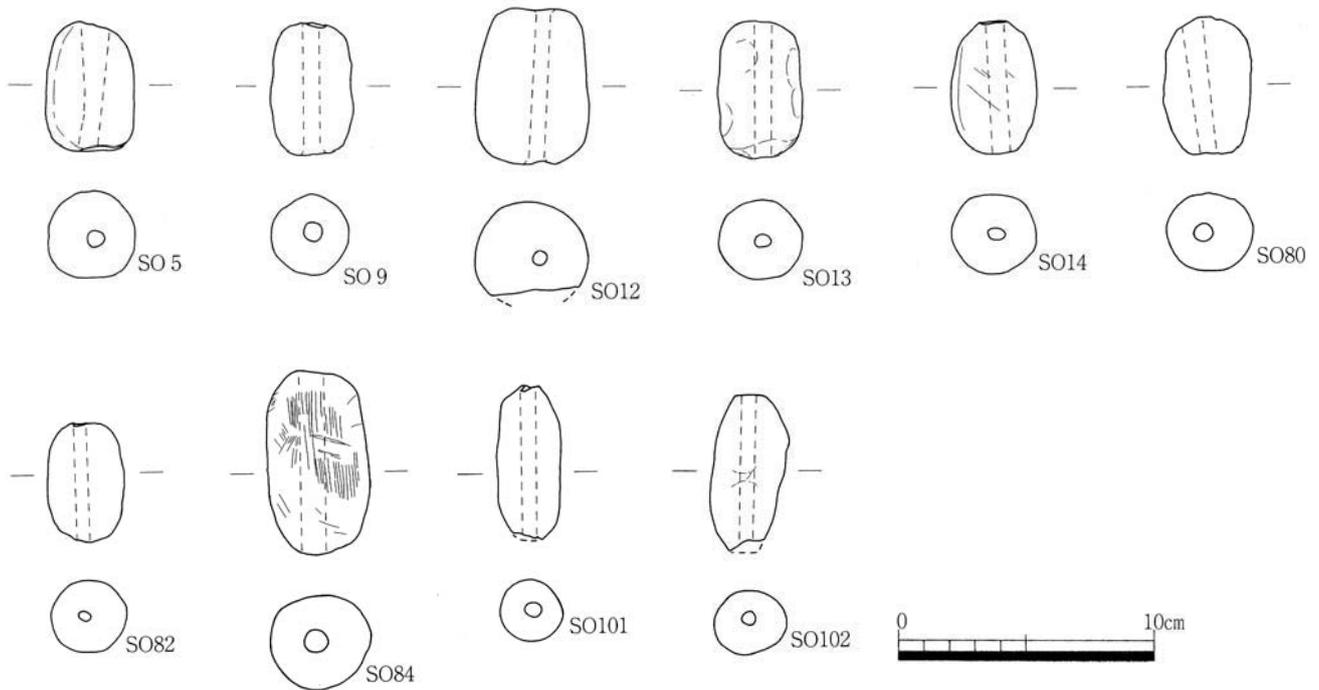
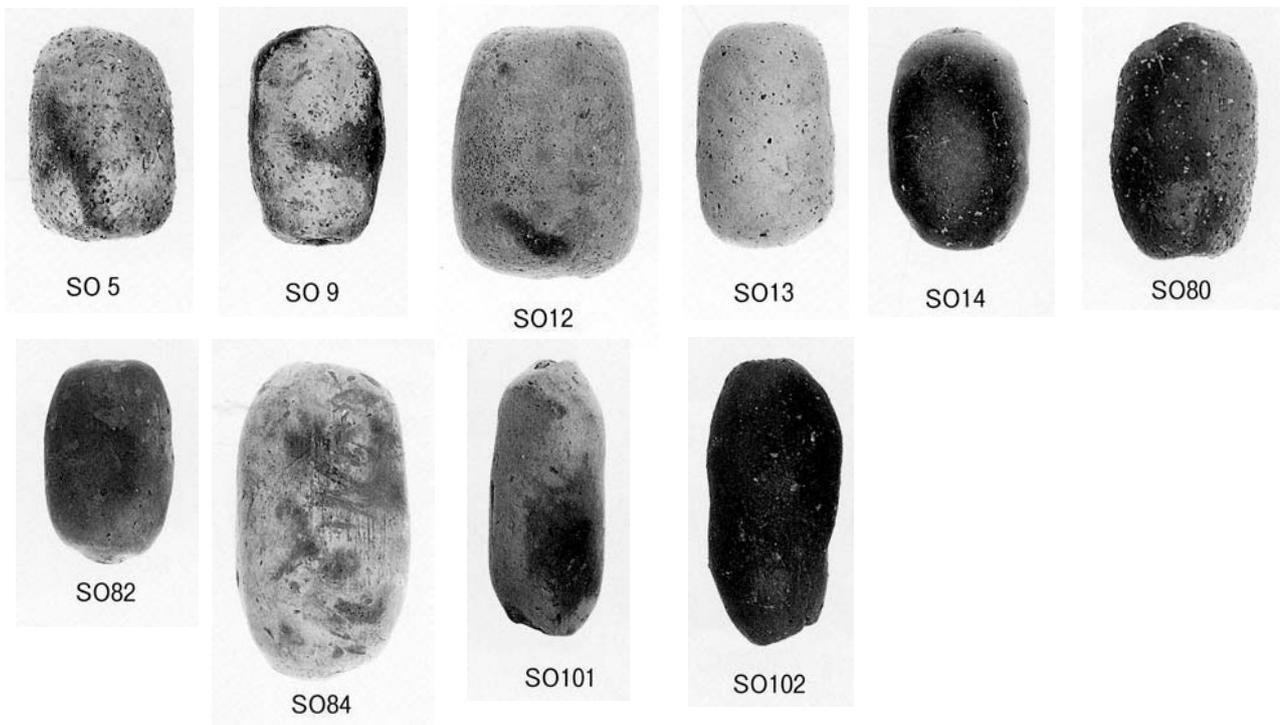


図4 赤野井浜遺跡出土主要土錘（実測図は1/3）

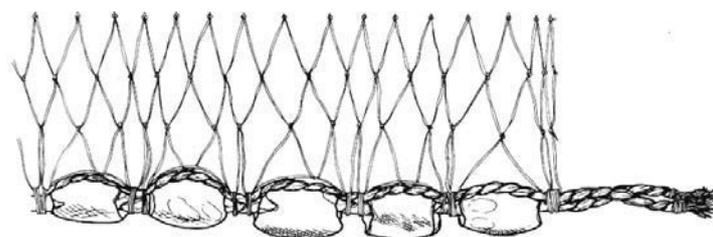


図5 土錘の装着状況

（大沼芳幸「正伝寺南遺跡出土の漁網錘について」『正伝寺南遺跡』1990 県教委・協会より抜粋）

参考資料



赤野井浜遺跡遠景（東より）



鯨面土偶（左上）・土偶形容器（左下）
屈折像土偶（右）

木偶（右 拡大写真）

